

2022年横浜ナザレン教会降誕節第三主日(1/9)礼拝

「キリストの証人となる」

使徒言行録第1章3節から8節・説教原稿

### 【聖書】

使徒言行録 1:3 イエスは苦難を受けたのち、ご自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話されました。4 そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。5 ヨハネは水で洗礼(バプテスマ)を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼(バプテスマ)を授けられるからである。」

6 さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。7 イエスは言われた。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。8 あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

#### 1 最後の四十日間

使徒言行録の最初は、ルカ福音書の要約と言ってよい部分、神の救いのご計画が、ぎゅっと凝縮され綴られています。その中でも主イエスと使徒達との地上での最後の四十日間は、人類史上、まれにみる四十日間です。十字架の死に打ち勝ち甦らされたイエス・キリスト、完全なる永遠の命が地上に現れた四十日間です。主と使徒達の様子は、4節に「**彼らと食事を共にしていた**」という言い方から、とても親しいものであったことが分かります。愛する人々との食事ほど、楽しいものではありません。この四十日は、主イエスと弟子達の喜びに溢れた時でありました。

#### 2 父の約束

さて、主イエスは、使徒達と過ごす喜びの日々が、そろそろ終わりに近づいている事を感じられたのでしょう。今後の事について次のように話されます。「**エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。**」この「前にわたしから聞いた、父の約束されたもの」というのは、ルカによる福音書第11章で、主イエスが「**天の父は求める者に聖霊を与えてくださる**」と弟子たちに語った言葉だと言われています。このルカ福音書11章で、主イエスは、天の父なる御神が、「何にもまして最もよいもの」として送ってくださる、と約束されるのが、聖霊なるみ神だ。儂い命の被造物に、聖霊なる御神をお与えくださる、それは、天使たちでさえ驚愕の声をあげ、大地も驚きのあまりその身を震わせるような、今までにない約束だと言ってよいのです。

私たち、あまりにうまい話を警戒します。つい最近、YouTube で動画をみようとしたら、

「何もしなくても一日一万稼げます」という胡散臭いCMが流れていました。勿論、すぐに止めましたが、ここでの主イエスはもっと信じられない話をされています。「何もしなくても、天の父なる御神に願い求め続ければ、聖霊なる御神が送られてきます」と言うのですから。しかし、その約束がどれくらい信頼できるかは、約束した人によります。ネットのCMで胡散臭い約束をしているのは、見も知らない人ですが、聖霊なる御神を約束くださるのは、天の父なる御神、人間とは違います。どこまでも徹底して誠実なお方です。どれ位誠実か？というと、さすらいの遊牧民に過ぎなかったアブラハムとの約束を守ろうと、神を蔑ろにし殺そうとさえする人々を赦し救おうとされました。人々がそれに応えようとしないので、遂にはご自身の最も大切な独り子を十字架に渡される事さえなさった方です。そして、今度は、ご自身に求め続ける者には誰でも、聖霊なる御神までもお与えくださる、と約束されました。このお方は、儂い被造物であり、不誠実な人間達にも誠実である事にご自身の全知全能を注がれます。まことに、私たち人間が考え造り出す偽りの神々とは全く異なるお方であり、まことに聖いお方である事が分かります。

### 3 わたしの証人となる

さて、父なる御神が被造物である使徒達やその後続く者達に、聖霊なる御神をお与えになる目的は、何なのでしょう。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」という主の言葉に答えがあります。「地の果てに至るまで、主イエス・キリストの証人となる」ために、聖霊なる御神は、被造物である使徒たちに降られ、そして、その後輩である私達にも降ってくださいます。

では、主イエス・キリストの証人になる、とは具体的にどういう事でしょうか。言うまでもなく、証人とは、何かについて、誰かについて、証言する人です。主イエスの証人とは、受肉された神の独り子、十字架と復活のイエス・キリストが、どのようなお方かを知り、証言して伝える人々です。

しかし、本で読んで知っているだけで実際には会ったことも話したこともない人について、裁判で証言する事はできません。キリストの証人もこれと同じです。イエス・キリストへの信仰がなくとも聖書を研究する学者はいます、聖書に詳しい歴史家や知識人もいます。しかし、彼らがイエス・キリストの証人となれるか？というと、決してそうではありません。彼らに分かるのは、せいぜい十字架に架かって死んで葬られたイエスまで。生きて働いておられる復活の主イエス・キリストがどういうお方かを彼らは、全く知らないのです。甦られたイエス・キリストを「我が主、我が神」と信じ、告白しない者には、復活の主イエスがどのようなお方かを知ることとはできず、証人になる事もできません。

それには、聖霊なる御神の力が必要なのです。私達の力だけでは、十字架に死んだイエスが永遠の命へと復活された事を受け入れる事はできない、ましてや、主イエスの十字架が自分の罪を贖う為であった、と信じる事はできません。使徒パウロも次のように言っていま

す。「誰も聖霊が与えられなければ、イエスを主とは言えない」(コリント I 12:3)。復活の主イエスの十字架が自分の為であったと受け入れ、我が主、我が神と告白する信仰があつてこそ、キリストの証人です。

もう少し、この事について考えてみたいと思います。私達がどこに立つかで、見えるものは全く変わってきます。桃太郎の話も、桃太郎側から見れば、極悪非道の鬼たちに正義の鉄槌を下した物語、桃太郎も猿、犬、雉は正義のヒーローです。しかし、鬼の立場から見れば、桃太郎もその仲間も、侵略者であり強奪者です。立つ立場によって物事の見方は大きく変わるのです。

また、「検察側の証人」というアガサクリスティの有名な推理小説をご存じでしょうか。ネタバレになるのですが、殺人犯として訴えられた男性の裁判で、男性に不利な証言をする筈の検察側の証人として法廷に出て来た女性が、実は被告の男性の為に証言していた、という小説です。このように、証人とは、どの側に立つかが重要で、どちらの側からの見方なのか問われます。桃太郎のたとえでもわかるように、立つ場所によって、物事の見え方は全く異なるのですから。この使徒言行録では、主が「わたしの証人」と仰る以上、使徒達、私達は、イエス・キリストの側に立って物事を見て、証言する事が求められているのです。では、イエス・キリストの側に立って物事を見る、とはどこに立つ事でしょうか？

復活の主イエス・キリストの十字架のもとに立つという事ではないでしょうか。イエス様が8節で「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。」という「力」とは、私達に働いて、復活の主イエス・キリストの十字架のもとに立って、自分自身を、隣人を、この世界を見るようにさせる力、聖霊なる御神の力ではないかと思えます。

この力を受けて、キリストの十字架のもとから、キリストの証人として世界を語った人にカール・バルトという神学者がいます。第二次世界大戦が終わって、ナチス・ドイツの残虐行為が明らかになるにつれて、キリスト教の指導者達は、こぞって「ヒトラーは悪魔だ」と言いました。しかし、カール・バルトは、「人間は悪魔にはなれない、ヒトラーも悪魔ではない」と主張します。彼は、ヒトラーとナチス・ドイツがした残虐行為を知らないわけではありません。むしろ、戦争の間も、ナチスドイツに反抗を続けた人です。しかし、バルトは、目をそむけたくなる行い、悪魔の所業としか思えない事をした人々をも復活の主イエスの十字架のもとに立って、受けとめていたのです。主イエスが十字架に架かって苦しみ抜いたのは、悪魔の為ではなく、人間の為です。主はヒトラーの為にも十字架で死なれた。バルトは、「父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているか分からないのです」と主イエスがヒトラーの為にも祈っておられた、と確信していたのだと思えます。ヒトラーと仲間達は、そのキリストの祈りを聴く事を拒み、滅びの道へと突き進んでいったように見えます。が、実際、最後には悔い改めたかもしれません。それは神と当人以外には分からない事です。そして、ヒトラー達が悔い改める事がなかったとしたら、その滅びを誰よりも悲しまれ痛まれているのは、復活されて今も生きておられる主イエス・キリストである、彼は、主イエスの十字架のもとに立って、そのように確信したのではないのでしょうか。途方もない愛が世界を覆うのが、イエスの十

十字架のもとからは見えるのではないかと思うのです。だから、キリストの証人として、復活の主イエス・キリストの十字架のもとに立ち、自分を、隣人を、世界を見ると、全く新しい自分、隣人、世界が見えてくるのです。

しかし、自分自身に関係のない人や親しい人なら、キリストの十字架のもとに立って、キリスト・イエスの慈しみの眼差しに入れられている人として見ることもできるでしょう。ですが、今、自分を苦しめている人、対立している人を、キリストの十字架のもとから見ることはとても難しいことです。簡単にできる事でも、すぐにできる事でもありません。長い時間がかかるでしょう、父なる御神とキリスト・イエスへの祈りなくしてはできない事です。しかし、神は願い求め続ける者には、必ず、聖霊なる御神をお送りくださいます。聖霊は、決して弱い方ではありません。苦しくつらい日々の内であっても、聖霊なる御神の満ちるところでやすらわせてくださいます。聖霊なる御神の満ちるところで、私達は、キリストの側に立つ証人として成長していき、キリストの際限ない愛を知るといふ大きな喜びを与えてくださいます。

今まで知らなかった新しい自分、新しい隣人、新しい世界との出会いを通して、私達はキリストの証人として成長していきます。ですから、聖霊と共に生きるイエス・キリストの証人としての日々は、新しい世界を知る冒険の日々。使徒言行録は、聖霊と使徒たちの、そして私達のイエス・キリストを知る冒険物語だと言えます。

#### 4 弱い時にこそ

そして、聖霊なる御神は、私たちの日々の生活を通してこそ、働いてくださるお方です。特に、弱い時、試練の時、苦しい時に強く働いてくださいます。それは、コリント信徒の手紙Ⅱ第12章の使徒パウロの言葉からもわかります。使徒パウロは、生きたまま天国に上げられるという言葉にならない経験をしました。が、その事で思いあがらないように、と一つのトゲが送られてきた、と語ります。具体的にこの「トゲ」が何なのかは語られていません。パウロが命をささげていた伝道の妨害となるような、人から忌み嫌われる病いではないか？と推測する人もいます。パウロは、「これを離れ去らせてください」と徹底的に主に祈り願いました。すると、主は次のように彼に答えた、というのです。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」。この主の言葉に、使徒パウロは、宣言します。「だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、寧ろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それ故、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。何故なら、私は弱い時にこそ、強いからです。」

使徒パウロは、病や様々な試練に弱る時にこそ、強く働いてくださる主イエス・キリストの力を、聖霊なる御神を通じて知るといふ経験しました。キリストは、私達の為に徹底的に弱くなってくださった、私達の弱さをその身で経験され、だからこそ、私達の弱さを、辛さをご自身のものとして深く隣んでくさり助けてくださる方だ、とパウロは気づかされたのです。そこに復活の主イエスが働いてくださるのであれば、私達は弱い時にこそ、強いのです。だから、弱い時こそ、キリストの証人として成長していく時と言えるでしょう。

使徒たちにそうであったように、父なる御神は、徹底した誠実さをもって私たちに聖霊なる御神をお送りくださいます。そしてキリストの証人として、神の国の完成に確かに用いてくださいますから、神を賛美せずにはおられません。